

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2019

特集 アグリデータ新時代の波



特集

アグリデータ新時代の波

3 データ活用型時代へスマート農業が動く

神成 淳司

農業はデータ活用型時代に入ってきた。そこで、情報通信技術研究の第一人者にビッグデータの活用による農業の未来を展望してもらおう

7 情報通信の先端技術が拓く農業の未来は

久住 嘉和

産官学連携によって情報通信大手が戦略的に進める農業ソリューションを紹介しよう。いずれも先端技術を活用した現場の取り組みだ

11 宇宙利用の観測データが創る次世代農業

原 政直

宇宙から農業現場を観測・収集したビッグデータにより、生産予測技術は新時代に入ろうとしている。データベース化する農業の今後とは

情報戦略レポート

15 大規模個人の経営実態は今

—2017年農業経営動向分析(個人経営)—

販売価格上昇で茶は2年連続の増収増益

畜産は飼料費、素畜費高騰で個人経営に負担大

経営紹介

経営紹介

23 株式会社土田鶏卵／福井県

土田 英夫、柘井 寿和

卵の福井県内販売シェアの8割を占める。地域への卵の供給を切らさないという供給責任を順守し販売先と消費者との信頼関係を構築、経営を拡大した

変革は人にあり

25 有限会社パインランドデーリィ／北海道

松村 孟

業務の効率化を目指し、酪農の現場でICTを導入。データベース化を進めスマホで牛のデータを確認し行動に移す効果は絶大だと語り、収益力を高めている



撮影:鎌形 久
新潟県五泉市
2015年3月9日撮影

フキノトウ

■雪解けの田んぼのあぜに顔を出したフキノトウ。静寂の冬から覚めて春への到来を告げる■

シリーズ・その他

観天望気

二つの農業哲学 秋津 元輝 2

農と食の邂逅

樋口 真理子/滋賀県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

西の、葉もの野菜 高山 なおみ 22

耳よりな話 203回

獣医学教育の礎 加茂 幹男 28

まちづくりむらづくり

基盤整備か農村景観の保全か、選択は共存。

むらのお宝マップ「平成の大絵図」に全員参加

本寺地区地域づくり推進協議会/岩手県一関市

五十嵐 正一 29

書評

野家 啓一 著『はざまの哲学』

宇根 豊 32

インフォメーション

日本人が営むベトナム農場を訪ねて 情報企画部 33

こだわりの県産食材の料理を味わいつつ商談

徳島支店 35

食い倒れの街・大阪で新たな農工商連携を学ぶ

大阪支店 35

適切なふん尿処理と売れる堆肥作りを考える

奈良支店 35

地域の市民を招いて食の大切さを発信 帯広支店 35

認定農業者の皆さまへ 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第14回アグリフードEXPO東京2019 38

4月号予告

特集は「平成農業を振り返る」を予定。

認定農業者制度の創設、農地法の改正、稲作経営安定対策の創設など、平成は農業界にとって、大きな変革を迎えた時代だったと言える。そこで、平成の時代を振り返り、次の時代を担う次世代の農業、担い手について展望する。

望天 観気

二つの農業哲学

人間の生存に欠かせない農業に私たちはどのように向き合えばよいのか。農業倫理学研究の第一人者である米国のポール・トンプソンによると、二つの哲学が農業近代化の過程に存在するという。一つは産業主義的農業哲学で、ここでは農や食は特別のものではなく、農業は単なる一つの産業部門にすぎないという信念が貫かれる。もう一つは農業本位的農業哲学で、そこには農は特別であり、農業を環境や社会面から注意深く考察することによって、持続可能性に関する固有かつ重要な示唆が得られるという信念がある。私としては、この対立する二つの農業哲学が、あるときは一方が優位に立ちながらも併存し、相互にけん制し合いながら近代農業の発展を誘導してきたと考えている。

日本の農産物生産費は他の先進国と比較して割高で、その価格は国際的な競争の中で低く抑えられざるを得ない。よって大規模化、効率化して他の産業部門に追いつかないと農業経営が安定せず、農業の担い手不足も解消されない。他の製造業と同じく自動化技術を農業にも導入して効率化と担い手不足解消を狙う、などは産業主義的農業哲学に即した農業像である。

それに対して、人間の生存にとつての食べ物の意義を重大に受け止めて、自分の身体はもとより、食べ物の生産と消費を通じてより持続的な社会を目指すという方向は農業本位的農業哲学を基礎としている。日本では有機農業と呼ばれてきた実践と運動や、世界的な動向では、自然の循環を維持・利用しながら農業生産を行うアグロエコロジーもその系列に位置付けられる。

農業本位的農業哲学として、最近における小規模農業への着目も特筆に値する。国連は二〇一九年から二八年までの二〇年間を「家族農業の一〇年」と定め、小規模農業に光を当てて、農業者の主権を守る動きを支援している。

日本でも小規模農業の存在が、地域資源や農村コミュニティの維持に貢献しているという実態がある。産業主義に偏るのではなく、日本の足元と世界の動きの両方を見据えながら、農業本位的農業像を政策哲学の中に正当に取り込むべきであろう。



京都大学 教授
秋津 元輝

あきつ もとき
1960年香川県生まれ。博士(農学)。三重大学助手、奈良女子大学助教授、京都大学准教授などを経て、2015年より現職。現在、アジア農村社会学会会長、地域農林経済学会副会長。専門は、食農倫理学、食農社会学、農学原論。

千数百年続く茶栽培の地で
自園自製自販の茶農家
お茶を使った洋菓子作り
急須で淹れる茶の復活へ
茶の裾野を拡げていきたい

農と食
の邂逅

樋口 真理子 さん

滋賀県甲賀市
有限会社 茶のみやぐら
製菓担当

茶消費量は数十年間減少傾向にあり、一つの特徴としてリーフティー(茶葉)を日常的に飲む層と飲まない層の二極化が進んでいる。「自園自製自販」の茶農家が抹茶ロールケーキや茶菓子製造で裾野を拡げ、お茶回帰に挑む





P19:険しい斜面を登り切ったところにある茶畑にて。「薄緑色の葉がゆらゆらとゆれる春から初夏の季節が一番美しいですよ」と真理子さん。左は昌直さん P20:ロールケーキは当日販売する分のみ作る(右上) 午前中は工房での作業、午後は店舗で接客にあたる(右下右)「今後は、地方発送する仕組みをつくり、製菓のスタッフを雇えるほどの部門にしていきたい」と真理子さん(右下左)この味を求め、京阪神から広くお客さんが訪れる(左)

まさかの菓子職人に

滋賀県最南端にある甲賀市信楽町は信楽焼の産地として知られるが、町の一角、朝宮地区はお茶の名産地でもある。一二〇〇年の歴史を持つ朝宮茶は、渋みの中に甘さが感じられ、香り高い逸品として知られる。現在は、約四〇軒の生産者が朝宮茶を作る。

険しい斜面に沿って広がる茶畑を樋口昌直さん(四二歳)が案内してくれた。「新芽がすくすくと成長する四、五月になってもこの辺りは冷え込むので、新芽の成長が遅いんです。その分、根から吸収した養分が茶葉にしつかり蓄えられる。これが香りのよさにつながります」

昌直さんの両親、昌晴社長(七二歳)がお茶の生産を始めたのは一九六七年のことだ。そして、渋みの中に甘さがある朝宮茶を知ってもらおうと、九六年から直売を始めた。それ以来、同地区では数少ない「自園自製自販」のスタイルを貫く。現在、六畝の茶園での生産を昌直さんが担い、母の加代さん(七〇歳)と妻の史佳さん(四〇歳)が販売、昌直さんの妹、真理子さん(三六歳)が製菓部門を担っている。

直売所「茶のみやぐら」を建て直売を始めた頃、真理子さんは中学生だった。「土日は手伝いましたが、誰もが都会に憧れる時期。私も大学から大阪に出ました」。大学卒業後、四年間ほど調査や営業の仕事に携わった。気ぜわしい毎日に「一度気持ちをリセット

トしよう」と朝宮の実家に戻った。外に出て故郷の良さを感じた真理子さんは、休日に店を手伝いながら陶芸を学んだ。「陶芸の道に進もうかなと。お茶を飲みたくなる急須も作りたかったです」

そんな真理子さんが一転、菓子職人の道を歩むことに。ケーキ作りが趣味というわけでもない。「自分でもまさかと思いました」。実家に戻った頃、「茶のみやぐら」では、集客のために自社のお茶を使ったアイスクリームを販売していた。当時、アイスクリームのもとになる半製品を外注していたが、その取引先から「継続が難しい」と告げられ、自社製造に切り替えるかどうかと選択を迫られた。それには大きな設備投資となる。どうしたものかを模索していた矢先、真理子さんの知人が抹茶カステラを手土産にやってきた。「茶のみやぐらで買った抹茶を使ったからおいしくできた」という一言がヒントになった。

陶芸と製菓の共通点

「お茶を使った洋菓子作りをしよう」。真理子さんは洋菓子を焼くためのオーブンを探し始めた。小さな家庭用を考えていたが結局、多様なお菓子ができる本格的な業務用を導入した。二〇一二年には六次産業化の総合事業化計画の認定事業者にもなった。「気付くと、後に引けなくなっていました」。まずは消費者に人気の高いロールケーキとプリンに照準を定めた。



落ち着いた店内(上) 遠くからでも見えるやぐらが目印。右から昌晴さん、加代子さん、昌直さん、史佳さん、真理子さん。前列は従業員の北本さん(下)

真理子さんの探究心にスイッチが入った。「より、うちのお茶の良さが感じられる味にしたい」――。孤軍奮闘が始まった。

抹茶ロールケーキとともに、珍しい煎茶入りロールケーキを作ろうという方向性が決まった。ロールケーキには生クリームが欠かせない。真理子さんは多くの乳業メー

カーからあらゆる種類の生クリームを取り寄せ、煎茶入りケーキの生地との相性を確かめた。生クリームと一言で言うが、メーカーや商品によって風味や殺菌方法が微妙に異なる。「煎茶のうま味、香りを活かすには、風味が控えめの生クリームがいい」と思ったんですが、実際に作ってみると逆。風

味高い生クリームの方が、煎茶らしさを引き立ててくれることが分かりました」。一年あまり試作を繰り返して完成した煎茶入りロールケーキ「煎茶のオトナロール」は、国産黒豆入りで煎茶本来の香り・うま味・渋みをも感じられる商品だ。

「飽きずに来たのは、陶芸と似ているからです」と真理子さんがつぶやく。器を焼くには釉薬が欠かせない。釉薬とは陶器の表面に付着したガラスの層を作るための材料で、鉱物を含む。「陶芸にマニュアルはありません。どんな鉱物を使い、どう焼くかをイメージして材料を準備していく。洋菓子作りも同じです」。作るお菓子のイメージができてようやく素材選びが始まり、目指すべきところに進む。「製菓担当になると決め陶芸を仕事にすることは諦めました。陶芸をやっていたら今の私はいないと思います」

顧客に届き始めた想い

真理子さんが洋菓子作りに全力投球したのは、「朝宮のお茶をどう活かすか」という想いがあったこそ。本当はお茶を飲んでほしい。だが、日本人のお茶離れが進む今、座して待つことはできない。「朝宮茶を作る農家のロールケーキだからおいしい」と評価してもらってこそ作る意味がある、この一心だった。「洋菓子屋さんのロールケーキに負けていないつもり、なんて。自分でハードルを上げてしまったかな(笑)」と照れる。

真理子さんの頑張りはお客さんに届き始

めている。「茶のみやぐら」では喫茶は行っていないため、菓子類は持ち帰りのみ。購入した商品を「ここで食べたい」という人には、ほうじ茶を振る舞っている。朝宮茶と相性のいい牛乳を提供してくれる牧場が見つかり、アイスクリームの販売も続けており、そちらを注文する人にもほうじ茶を出す。すると、ケーキやアイスクリームを買い求めた人が、やがて「今日はお茶をもらおう」と朝宮茶を購入してくれるようになった。客層も年配層からファミリー層、若年層へと広がった。家族連れの人から「子どもが毎日学校に持っていく水筒に朝宮茶を入れています」と言われることも。

現在、リーフティーを日常的に飲む人と、飲まない人という二極化が進行している。その間を埋められれば、と真理子さんは考えている。「お茶があり、お茶うけがあり、飲む人がいる。三つがそろってほっとする時間が生まれ、コミュニケーションが生まれる」。お茶は、日本人にとって欠かせない飲み物であるが、心の余裕や豊かさをもたらす役割を担っていることを改めて感じさせられる一言だ。「ケーキもアイスもお茶に目を向けてもらうための手段」と言い切る真理子さん。その手段にも寸分の妥協も許さない。

「煎茶のオトナロール」は、お茶の香りとほろ苦さが後を引くおいしさ。真理子さんの強い想いが伝わってくる味だった。

(青山浩子／文 河野千年／撮影) **F**

東京から神戸に越してきて今年で三年目。私は今、六甲山の麓で一人暮らしをしています。

神戸は海と山に挟まれた街。両方向から風が吹いてくるせい、空気が澄んでいる気がします。冬はことのほか冷たく澄み切って、窓から見える海もきらきらです。そんな海を眺めながら坂を下るのは、とってもいい気分。おかげで東京にいた頃よりもずっとよく歩けるようになりました。

こちらに来て新しく出会った野菜はいろいろあるけれど、葉もので好きになったのは、まずきく菜。

きく菜は葉っぱの幅が広く、厚みもあって、茎が平たく軟らかい。よく似た関東の春菊は、おひたしやすき焼きに入れても、時間がたつとどうしても苦みが出て、黒っぽくなってしまふのを残念だなあと思っていたのです。春菊とは別の品種だそうですが、きく菜は苦みが淡く、火を通して葉がへたれません。私はごま油でさっと炒めたのにおしよゆをほんのちよつと回し掛け、ひねりごまをたっぷり合わせた「炒めごま和え(自分で名付けました)」が好きで、よく作ります。あと、お好み焼きにもたっぷり入れます。ソース味にも合うのです。

もう一つ好きになった葉もの野菜は、しろ菜。

しろ菜は、関東でもよく見かける山東菜さんとうなに似た野菜で、薄手の軟らかな黄緑色の葉っぱに、白く透き通るような幅広の茎。火が通りやすいので、ざくざく刻んでスープやみそ汁に加えてもいいし、もちろんおひたしや、油揚げと合わせて煮浸しにしてもおいしい。私はニンニクとオリーブオイルでくったりするまで炒め、ショートパスタに合わせるのも好きです。白い茎が、火を通すとねっとりした感じになるのです。

しろ菜でもきく菜でも、買って帰ったらすぐに袋から取り出し、束をほだいて水に浸けます。葉が開いてシャキッとしたら、新聞紙で包んで、さらに厚手のビニール袋に入れ、冷蔵庫に保存します。

こうしておくくと、一人暮らしの私でも最後のひと茎までみずみずしいまま食べられるのです。



たかやま なおみ
1958年静岡県生まれ。レストランのシェフを経て料理家に。文筆家としての顔も持つ。著書に『料理＝高山なおみ』(リトルモア)『たべもの九十九』(平凡社)など多数。絵本は『どもんどだっく』(プロンス新社)『たべたあい』(リトルモア)(共に絵・中野真典氏)などがある。現在『帰ってきた 日々ごはん⑤』(アノニマ・スタジオ)を製作中。

©寺澤太郎

料理家
高山 なおみ

西の、葉もの野菜

獣医学教育の礎

畜産関連の碑めぐり (20)

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

京

成電鉄・京成成田駅から南東におよそ七キロメートル、成田空港の西側、空港境界より西に五〇〇メートル、三里塚街道(千葉県道六二号)に面した三里塚記念公園内にある三里塚御料牧場記念館の前に「獣医学実地教育創始記念碑」が建てられています。

この地碑には、「本邦獣医学の実地教育は明治十一年下総牧場の前身取香種畜場に獣医科を置き国内より募集する牧羊生を実地教育したるに起因す 当時米人ジョンストドクトルレーサム英人ケエー氏等相次で之に衝り同十三年 変則獣医科と改め場長岩山敬義初代校長となり桑島景連 今泉六郎 玉川勝蔵 三浦清吉 新山莊輔氏等当時の教職に任せられたるに始まるものとす 昭和十四年四月 創始六十年記念建設 同学有志者」と記載されています。

この地は、一八七五年、内務卿・大久保利通によつて「取香種蓄場(一八八一年下総種畜場、一九四二年下総御料牧場と改称)」として開設され、牛馬の改良を行うとともに、外国人技師を招聘し日本の牧畜技術の最先端を担いました。

大正・昭和にかけて徐々に規模が縮小し、一九六九年成田空港が建設されたのにもない牧場は栃木県に移転し、跡地に「三里塚記念公園」が開設され、「三里塚御料牧場記念館」が

建てられました。

日

本における近代的な獣医学教育は、一八七四年 内藤新宿試験場(現在の新宿御苑の敷地)に「農事修学場」が設置され、一九七六年に農学・獣医学などの専門科が設けられたことに始まります。この組織は、一八七七年一月「農学校」と改称、一二月駒場野に移転し、八二年「駒場農学校」と改称、現在の東大農学部に引き継がれています。



獣医学実地教育創始記念碑

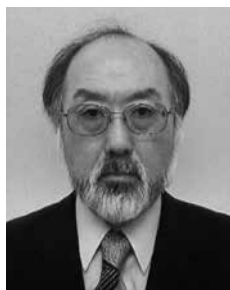
七八年、取香種蓄場内には「獣医科」が設置さ

れ、獣医の実地教育が行われ、「農学校」の獣医の実習も行われました。

七八年に行われた「農学校」の開校式では、開校を熱心に推し進めた大久保利通が、祝辞で、「本邦初の農学校の建築にあたり、農をもつて国民の生活を豊かにする事業は、まさに今日この日からはじまるのだ。」と述べています。

八〇年、新たに日本語で獣医学を教授する「変則獣医学科」が下総種畜場内に開設され、農学校獣医学科第一回卒業生の新山莊輔と三浦清吉らが教職につき、日本の獣医学の基盤が築かれました。八二年、下総種畜場内の変則獣医生徒が「農学校」に編入され獣医学分科になりました。新山莊輔は、後に下総御料牧場の初代場長となり、「日本獣医学の生みの親」と言われています。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。



基盤整備が農村景観の保全か、選択は共存。 むらのお宝マップ「平成の大絵図」に全員参加

岩手県一関市

本寺地区地域づくり推進協議会 事務局長

五十嵐 正一



もとは平泉中尊寺別当の荘園

平泉・中尊寺経蔵きやうぞうの別当べつどう(統轄した僧官)の荘園があったところに、その昔「骨寺村」と呼ばれた地域がありました。私たちはその中核の本寺地区で、今、住民全員でつくり上げた地域おこし基本構想図を「平成の大絵図」と命名し、地域づくりの指針にして活動しています。私たちは、この中世から続く農村景観を保全・活用していくことこそが、地域の存続とむらづくりにつながるものという確固たる想いを持っています。この想いを支えに、あらゆる困難を乗り越えてきました。

本題に入る前に、本寺地区をめぐる歴史をお伝えします。骨寺村の歴史は古く、一二世紀までさかのぼります。平安浄土の国づくりを理想に掲げた藤原清衡は、自らの発願による「紺紙金銀字交書一切経」(国宝)の完成に功のあった自在房蓮光を、このお経を納める中尊寺経蔵の初代

別当に任命しました。蓮光は私領であった骨寺村を経蔵に寄進し、経蔵の維持のための費用を賄う土地(荘園)としました。

現在まで本寺地区は、中世時代の農村風景が色濃く残っており、中尊寺に現存し国の重要文化財に指定されている「陸奥国骨寺村絵図」(鎌倉時代)南北朝時代に作成されたと言われている)に描かれている堂社などが当時のままに残っています。二〇〇五年には「骨寺村荘園遺跡」として、国の史跡に指定されました。文化的景観として最も重要な要素は、現地の微地形を反映した曲線状の農道・水路・畦畔群で、これらは中世以来の田屋敷型散居集落の景観の特質を今に残すものとして高く評価されています。

一時は遺跡、農地整備で対立

今では農村景観を保全・活用が統一ベクトルとなつていますが、一九九六年頃からは、地域では基盤整備をめぐり激しい意見の対立が見られ

ていました。前述の通り中尊寺とのつながりが深いことや、九三年にNHK大河ドラマ『炎立つ』が放映されたことから、地域の歴史を見直すという地元有志が「美しい本寺推進本部」を発足させ、市に史跡調査の要望を行うなど、調査・研究の動きが始まりました。

一方で厳しい農業情勢の中、効率向上のため基盤整備を推進したいと考えている人もいました。中世からの農村景観が現存することは、大規模な農地の整備が行われてこなかったことを意味します。これまで地域では何度か農地整備の話が出たものの、実現に至りませんでした。当時ウルグアイラウンド関税対策で補助率の高い基盤整備策が出てきた時期でもあり、このチャンス逃す手はないとの想いで「基盤整備推進委員会」を立ち上げ、効率的な営農の推進を目指すグループが出てきました。小生もその一人でした。

やがて、九七年に「陸奥国骨寺村絵図」が国の

集約し、「地域づくりの基本構想」としてまとめ上げました。また、「陸奥国骨寺村絵図」に対比し、作成した基本構想図を「平成の大絵図」と命名、今後の地域づくりの指針としてまとめ上げました。

ところが、住民がひどく落胆する出来事に見舞われたのです。

構成資産からの除外の衝撃

協議会を立ち上げて四年後の二〇〇八年。「平泉の文化遺産」の世界遺産登録がまさかの「登録延期」となってしまったのです。さらに追い打ちをかけるように、再登録を目指す過程の中で、当地域が「構成資産」から除外されてしまったのです。それを聞いた住民の衝撃・落胆・怒りは、言葉で表現できないほどでした。

しかし、この衝撃を乗り越えたのは、夢語りでまとめあげた「地域づくりの基本構想」と「平成の大絵図」の存在でした。これらを自らの手でつくり上げた私たちは、すぐにこう考えなおすことができました。

「除外により自分たちの農村景観が否定されたものではない。骨寺村荘園遺跡には揺るぎない価値がある」と。

そしてこれまでまとめ上げた「地域づくりの基本構想」の取り組みを、これまで通り淡々と続けることが、地域おこしに、世界遺産の追加登録につながっていくとの確信を持ったのです。

「平成の大絵図」への取り組みの一部をお話ししましょう。現在、「地域づくりの基本構想」の七六事業のうち、既に約六割にあたる四四事業が

事業化、または事業実施済みとなっています。

まずは地域外の人に骨寺村荘園遺跡を知ってもらうことから始めることとし、協議会を主体とする体験交流事業お田植え祭りを〇五年五月から始めました。これは約一五〇人ものが参加があり、大好評に終わることができました。

その後、イベント会場を中世から続く復田された小区画水田で行うこととし、さらに名称を東日本震災以降には田植え体験交流会に改称、昨年で一四回目の開催となります。また、秋には稲刈り体験交流会も実施するなど、協議会の最も大きな都市農村交流イベントとして定着しています。

〇七年からは、経蔵別当に上納される年貢の内容を記した「骨寺村所出物日記」(中尊寺書物、一三二八年、重要文化財)や「骨寺村在家日記」(中尊寺書物、南北朝時代、重要文化財)に記されている公事に倣い、収穫したお米や薪などを、かつての荘園主であった中尊寺に貢納するイベントとして、中尊寺米納めを開催し、中尊寺との歴史的つながりを深める取り組みも行いながら、骨寺村荘園遺跡を内外に情報発信しています。

荘園遺跡活用し情報発信拠点

また、世界遺産登録延期・構成資産除外は想定外の事態でしたが、世界遺産登録を前提に提案された「骨寺村荘園遺跡」の情報発信拠点ならびに農家レストランを併設した「骨寺村荘園交流館」が二〇一一年にオープンしました。この施設は、市の指定管理を受けた地域の人達により管理運営が行われているとともに、女性の就労の

場や地域の交流の場となっています。

最後に、全国に例のない「景観保全型農地整備」について触れたいと思います。〇五年に整備同意がとりまとめられたものの、具体的な整備内容の取りまとめには大変苦労致しました。

特に地域内にある約二三キロメートルの水路の整備内容の考え方に、関係機関と農家との間の隔たりが生じていました。農家側は、将来の管理の容易なコンクリート水路での整備を望んでいましたし、関係機関側では、「重要文化的景観」の大きな要素となっていることから、伝統的な土水路を残してほしいとの考えで一時期隔たりがありました。しかし最終的に農家が、折れる形で将来の管理の容易なコンクリート水路ではなく土水路を保全する整備内容で集約され、〇八年から工事開始、一二年に完成しました。その後、地元の建設業者などからボランティアで、土水路の保全作業に協力したいとの申し出があり、整備に関する協定を締結し、これまで継続して秋と春の年二回、地元農民と一緒に作業を行っていたいただいています。

土水路として残された水路は、今、中世から続く昔ながらの農村景観を保ちながら、ホテルが舞う農村としても、その多様な機能を發揮しつつあり、新たな取り組みとして「ホテルを見る会」を実施するなど、都市農村交流の一役を担っています。このように、中世から続く「自然・文化・景観」を活用していくことが、地域の存続やむらづくりにつながるものと信じて、地域一丸となって今後も取り組んでいきたいと考えているところです。

『はごまの哲学』

野家啓一著



(青土社・2,200円 税抜)

当たり前前が見えてくる哲学

宇根豊

(百姓・思想家)

農業も科学技術を抜きにしては、語れない時代になった。新しい技術を追い求めるのもいいが、たまには哲学してみるといい。そこで一番のおすすめが野家哲学だ。何よりも文章が明晰で、読みやすい。科学史から学ぼうとするなら『科学哲学への招待』(ちくま学芸文庫)がいいが、ここでは最新の本を紹介する。日本の「科学哲学」を切り開いてきた第一人者の本だ。

そこでまず、皆さんに次の言葉を聞いたことがあるか、と尋ねたい。「科学革命」「自然主義」「パラダイム」「心の哲学」いずれも現代社会の潮流をけん引しており、私たちの思考の中にすっかり入り込んでいる。しかし、私たちはそれを自覚していない。哲学していないからだ。

かつては経験を知識にしてきた。現代は、知識も情報処理で取り込まれているように見える。

それは科学のすごさであり、欠陥なのだ。細部しか見えなくなり、全体を総合する知恵が衰えようとしている。遺伝子組み換え作物、スマート農業は、単に新しい農業技術ではなく、新しい世界観・自然観・人間観を伴っていることに気づくために哲学してみよう。

野家さんは、「哲学とは、自明なものを自明ではないようにする」と言う。例えば、ドローンで稲を撮影して、窒素濃度を推定し、施肥量を計算する技術が普及し始めている。このことで、百姓にとっては当たり前前に身に付けていた(自明だった)稲への情愛・まなざしが、崩壊するかもしれない。いやいや、そもそもこういう発想の技術はなぜ生まれてきたのか。それを考えるのが哲学だ。

農業界で「自然主義」がいつのまにか浸透してしまっている。現代の自然主義の代表は、「意識や価値観なども、胆汁が肝臓から出てくるように、脳から生まれる自然現象だから、やがて自然科学で解明できる」と主張している。

これを野家さんは「人間が身体的存在であることを忘れている」と批判している。私たち百姓は身体で喜びと疲れを感じ、そして相手の稲や蛙に話し掛ける。決して、脳内に映っている稲や蛙に話し掛けたりはしない。「われわれは意識のスクリーンを通して対象と向き合っているのではなく、対象の傍らにじかに居合わせているのである」。こういう哲学にこそ、百姓や農業専門家は学ばないといけない時代になった。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年1月1日~1月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 TAGの正体 農業も自動車も守れない日米貿易協定	JAcorn農業協同組合新聞、 農文協/編	農山漁村文化協会	¥1,200
2 誰も農業を知らない プロ農家だからわかる日本農業の未来	有坪 民雄/著	原書房	¥1,800
3 サカナとヤクザ 暴力団の巨大資金源「密漁ビジネス」を追う	鈴木 智彦/著	小学館	¥1,600
4 農業崩壊 誰が日本の食を救うのか	吉田 忠則/著	日経BP社	¥1,800
5 スマート農業のすすめ 次世代農業人【スマートファーマー】の心得	渡邊 智之/著、 産業開発機構/編	産業開発機構	¥1,800
6 スマート農業バイブル Part II『データドリブン』で日本の農業を魅力あるものに		産業開発機構	¥2,500
7 IoT・自動化で進む 農業技術イノベーション	(一財)社会開発研究センター/編	日刊工業新聞社	¥2,000
8 ビレッジプライド「0円起業」の町をつくった公務員の物語	寺本 英仁/著	ブックマン社	¥1,600
9 保持林業 木を伐りながら生き物を守る	柿澤 宏昭、山浦 悠一、 栗山 浩一/編	築地書館	¥2,700
10 「複合林産型」で創る国産材ビジネスの新潮流 川上・川下の新たな連携システムとは	遠藤 日雄/著	全国林業改良普及協会	¥3,000

日本人が営むベトナム農場を訪ねて

有限会社 西部農産ベトナム

国内大手の米生産法人である株式会社西部開発農産は、ベトナム人技能実習生の受け皿の役割を實現し、ベトナム農業の発展に寄与するという壮大な構想がある。

そのため二〇一五年、ベトナムで現地法人を立ち上げ、高収益の米生産モデルを確立させようと取り組みを開始した。現在は、土地確保の点で課題があり、一時的に品目を野菜に転換している。

ベトナムに新たな風を送ろうとする熱い想いを聴いた。

野菜でバリューチェーン構築

ベトナムの北部に位置する首都ハノイ市。中心街から車で三〇分の場所に西部開発農産が立ち上げた現地法人・有限会社西部農産ベトナムがある。

西部農産ベトナムが運営する「Seibu DNA モデル農場」では、ベトナムに在住する日本人社長とベトナム人従業員三人が、一〇〇〇区画のほ場二カ所で、ハウ

ス栽培のメロンやイチゴ、露地栽培のベビリーフ、アスパラガス、トマトなど約一〇品目の野菜を栽培している。特にベビリーフは、ベトナムでほとんど生産されていない希少性から、販売先に評価され高単価で販売している。

「販売先は、日本食レストランが中心です。さらにマーケットリサーチを進め、技術的に安定生産ができ、かつ高単価な品目を増やしていきたいです」

西部開発農産常務で、海外事業を担当する照井涉さんは話す。野菜生産では、ハノイ市の中小卸売業者と連携協定を結んでいる。野菜の販路を確保したい西部農産ベトナムと、日本式農業で生産された野菜で差別化を図りたいパートナー企業と思惑が合致した。

協定の内容は、「農業生産を共同で行うこと」「生産した野菜はパートナー企業に出荷すること」という二点で、二〇一七年九月に「Seibu DNA モデル農場」を共

同開設。生産から販売までのバリューチェーンを構築した。

技能実習生の受け皿に

西部開発農産は岩手県に本社を置き、八〇〇〇畝を超える経営規模で米や大豆などを中心としながら野菜生産や和牛の肥育にも取り組む。経営のモットーは「地域の農地を守る」で、近隣の後継者不足などで農業を継続できない農家さんからの作業受託やどんなに悪条件の耕作放棄地でも引き受けるなど、地域に貢献してきた。狭小な農地を集約し農地を整備、農業機械をフル活用することで収益性の高い大規模米生産を実現させてきた。

西部開発農産がベトナムに進出したきっかけは、二〇一二年にベトナム人技能実習生を採用したことに始まる。採用のためベトナムに訪問した前会長は、「自分たちの技術を活用すればベトナムの農業に貢献できる」と感じた。ベトナムでは、農業は基幹産業



の一つであるが、特にベトナム北部では零細農家が多く機械化が進んでいないと言えない。そこで、西部開発農産の持つノウハウを活用した機械化による高品質米栽培など総合的農業の展開を思い立った。

「私たち、西部開発農産がこれまで管理してきた農地は一区画の面積や形が違うなど多種多様です。その経験を活かし、ほ場ごとに関わって耕作方法を確立しているのがわれわれの強みと考えています。そこで、これら技術をベトナムで活用すれば狭小地のほ場が多いベトナムでも収益性の高い米生産が可能となり、ベトナム農業従事者の農業技術や所得向上につながると考えたんです」

ベトナム人技能実習生が大規模機械を利用した米生産を西部開発農産で学び、実習期間が終了しベトナムに帰国した後は、彼らがその技術を活用した高収益米生産を行う。そしてその方法を新しいビジネスモデルとしてベトナムに広



パートナー企業と展開する農場



ハノイにある事務所

めればよい——。

このような考えから西部開発農産は、三年後の一五年に西部農産ベトナムを立ち上げた。

農地の確保に苦戦

こうしてベトナムで新たなビジネスモデルの実現に向け動いてきたが、現在残念ながら、帰国した実習生は西部農産ベトナムで働いてはいない。西部開発農産で学び、ベトナムに帰国した実習生は八人いる。そのうち数人が西部農産ベト

ナムに入社したが、その後しばらくして転職してしまった。

退職の原因については、はつきりしている。照井さんは、「現在ベトナムでの栽培品目は野菜であり、日本で学んだ技術をそのまま活かせる環境とは言えません。これが大きな理由です」と言う。そして「実習生の受け皿としての機能を果たすためには、米を本格的に生産する必要があります」と続けた。では何故、西部農産ベトナムでは米の本格生産を開始していないのか。ベトナムでの大規模米生産の実現には高い壁があるという。

ベトナムでの生産は、米から始めた。二

〇一二年に風土に適する品種研究のため試験栽培を開始。合計一〇カ所のほ場で「コシヒカリ」や「ひとめぼれ」などのジャポニカ米一〇種類を栽培した。

農地の拠点はベトナム北部に決めた。米生産は、南部が盛んだが、その分、農地に空きがない。北部は平坦な農地が少ないが比較的競争が少なく、参入可能な地域であると判断したことがこの地を選んだ理由だという。

日本とは異なる環境に悪戦苦闘しながらも徐々に生産技術を確立し、特に「ひとめぼれ」はうまく生産できる自信も付いた。ところが、農地の確保が大きなネックとなった。ベトナム国内の省ごとに異なる規制も高いハード

ルとなり、現在も農地の確保が困難な状況だ。

ベトナム農業の発展へ

そこで、一時的にはあるがメインとなる品目の転換を決意した。小さい面積でも経営継続可能な野菜に切り替えることにしたのだ。「ベトナムからの撤退も考えましたが、ベトナム進出を考えた初心に戻り、品目を変えて事業を継続することに決めました」と苦渋の選択をした理由を語る。現在、野菜の出荷で実績を積み、将来的な大規模農地確保を目指している。

「私たちの本流は米生産だと思っています。必ず米でベトナム農業に貢献します」と。

(情報企画部 柴崎 勇太)

Data

株式会社 西部開発農産

岩手県北上市に本社。照井勝也代表取締役社長。資本金一六九七万円。一九八六年に会社設立。水稲、大豆、小麦、ソバ、野菜類の生産、黒毛和牛の繁殖・肥育など。生産から加工、販売、直営店まで展開している。直営店では、牛肉を中心に米、野菜、加工品を組み合わせ、安心・安全・新鮮でおいしい物をお客さまに提供し喜んでいただくことを目指している。

有限会社 西部農産ベトナム

ベトナムハノイ市に本社。資本金約一五〇万円。西部開発農産の一〇〇%出資により二〇一五年に設立。日本人社長が在住。ベトナム人従業員三人。

商談会

こだわりの県産食材の料理を味わいつつ商談

徳島県農業法人協会と「阿波の食材」商談会を共催。会場にはサツマイモやレンコン、鶏肉、ユズ果汁、阿波晩茶など県産の農畜産物・加工品を使った一六の料理が並び、試食後商談が行われました。

参加者からは「取引しなかった企業のバイヤーと直接商談でき、有意義だった」など、販路拡大への手応えを感じる声が寄せられました。

一月六日、於：徳島市、参加者：県内農業者、食品加工業など一六の出店者、宿泊業、小売業、飲食業など一五社のバイヤーなど総計五四人、後援：J Aバンク徳島、阿波銀行、徳島銀行（徳島支店）



多くの個別商談で熱気にあふれた会場

セミナー

食い倒れの街・大阪で新たな農商工連携を学ぶ

大阪商工会議所・食料部会セミナーの開催に協力。千葉大学の齋藤修名誉教授はフードチェーン構築をテーマに、「過大投資しがちな六次産業化より、経営資源を持ち寄る農商工連携を進めるべき」と力説しました。株式会社ぎょうざの満洲代表取締役の池野谷ひろみ氏からは、農業者との連携や自社農園の取り組み、今後の課題などの紹介がありました。参加者からは「原料調達から加工・販売までの価値連鎖の重要性を認識した」などの感想が寄せられました。

一月八日、於：大阪市、参加者：食品企業など五〇人（大阪支店）



連携事例を織り交ぜて分かりやすく解説

セミナー

適切なふん尿処理と売れる堆肥作りを考える

畜産農家向けに経営者セミナーを初開催。公庫テクニカルアドバイザーの加茂幹男が「ふん尿処理と堆肥化」をテーマに講演し、「悪臭対策をしないと近隣住民の反感が起きる。多少の設備投資をしても環境に配慮した経営をすべき」と説明しました。また、全国の売れる堆肥作りの事例が紹介されました。

参加者からは、独自の堆肥製造を行う事例紹介や「ふん尿処理は地域全体で取り組むべき課題だ」などの意見がありました。一月一六日、於：奈良支店、参加者：畜産経営者など三〇人（奈良支店）



参加者は加茂アドバイザーの講演を熱心に聴講しました

公開講座

地域の市民を招いて食の大切さを発信

公開講座を開催し、NHKで六〇年続く「きょうの料理」の司会を務める元NHKエグゼクティブアナウンサー、後藤繁榮氏が講演。後藤氏は軽妙なトークで番組裏話を披露しつつ「食を育む心」について語り、会場は笑顔広がる温かい雰囲気になりました。

「番組開始当時、国民の四人に一人が栄養不足だったとは知らなかった。今の豊かな食を支える農畜水産物と生産者に、より感謝の心を寄せたい」などの感想が届きました。一月二十九日、於：帯広市、参加者：公庫お取引先、地域の皆さまなど一九〇人（帯広支店）



柔らかな語り口で舞台裏を話す後藤氏

認定農業者の皆さまへ

自主性と創意工夫を活かした 経営改善を応援します

経営改善に取り組む認定農業者の皆さまのさまざまなニーズにお応えします。

■スーパーL資金（農業経営基盤強化資金）

ご利用いただける方	認定農業者（農業経営改善計画を作成して市町村長の認定を受けた個人・法人） ※なお、個人の場合、簿記記帳を行っていること、または今後簿記記帳を行うことが条件となります。	
資金の使いみち	農業経営改善計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	農地など	取得のほか、改良・造成も対象となります。
	施設・機械	農産物の処理加工施設、店舗などの流通販売施設も対象となります。
	果樹・家畜など	購入費、新植・改植費用のほか、育成費も対象となります。
	その他の経営費	規模拡大や設備投資などに伴って必要となる原材料費、人件費などが対象となります。
	経営の安定化	負債の整理（制度資金は除く）などが対象となります。
	法人への出資金	個人が法人に参加するために必要な出資金などの支払いが対象となります。
ご融資条件	融 資 限 度 額	【個人】 3億円（特認6億円） 【法人】 10億円（特認20億円【一定の場合30億円】）
	ご 返 済 期	25年以内（うち据置期間10年以内）
	利 率（年）	期間により異なる利率が適用されます。詳しくはお問い合わせください。
	担 保 ・ 保 証 人	ご相談の上、決めさせていただきます。
ご留意いただきたい事項	1. 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 2. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。	

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆現在(二〇一八年二月時点、わが家では、ナシ畑の改植作業がピークを迎えています。二月二日に苗木の定植、堆肥入れが終了しました。この畑は、一九八二年、水田三〇^㉗取得後に、公庫資金を利用して、転作のため盛り土、排水、棚張り、灌水工事を実施した、思い出深い畑です。今回、息子との事業主交代の記念に、三十七年前に植えたナシの樹を改植しました。

抜根作業の際には、六代目とする小学校三年生の孫も、息子が運転する重機に同乗して応援してくれました。

この新たな一年生のナシの樹も、地元JA直売所の収穫体験用の畑、また、農林水産祭天皇杯受賞産地

のシンボルとして役立ってくれることを夢見ています。

今後プロの百姓として、入魂の農産物を作っていきます。

(福岡県筑後市 角繁男)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。掲載者には、薄謝を呈呈します。

【郵送およびFAX先】
〒〇〇〇〇〇〇四
東京都千代田区大手町一九一四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫 農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

編集後記

◆今号の特集記事で触れられている「WAGRI」の本格稼働を控え、農業界にもデジタル化の波が押し寄せています。農業経営者の方々にとって、この波は今後の経営を大きく左右するものになることでしょうか。アナログ人間の私には、理解が難しいことも多く、次世代農業を考えるためには努力が必要と痛感しました。(西山)

◆栄養豊富な基礎食品の鶏卵。今回「経営紹介」で土田さんのお話を伺い、鮮度の良い鶏卵を安定供給し続けることの大変さを実感。毎日当たり前のように食べられること、ありがたいが身に染みました。おいしい鶏卵を生産されている養鶏家の皆さまに改めて感謝し、今日も朝の卵かけご飯から夜のオムライスまで、「お世話になります」。(高雄)

◆特集でNTTグループの農業ソリューション「牛の出産時期通知」に触れ、二〇二二年九月号の農家の嫁・三上亜希子さんを思い出しました。エッセイで三上さんが暮らしの中であったらいいなと思うことを綴った中に、「牛の鳴き声翻訳機」がありました。それは寝ずに気をもむ出産予定日間近の牛に付けるというものでした。(城間)

◆iPhone使用者の私。どこに置いたかすぐ分からなくなるため、GPSの位置検索機能に助けられています。そんな衛星リモートセンシング技術が、農業生産管理に応用されていたとは！特集で原さんが語るシステムは、懸案だった被害による影響を除去した画期的なもの。その柔軟な発想と応用力の高さに感心させられます。(前島)

AFCフォーラム Forum

- 編集

鳴谷 元	西山 大也	高雄 和彦
柴崎 勇太	城間 綾子	前島 幸子
鈴木 晃子		
- 編集協力

青木 宏高	牧野 義司
-------	-------
- 発行
 (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>
- 印刷 凸版印刷株式会社
- 販売
 株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/
- 定価 514円(税込)
- ◆ご意見、ご提案をお待ちしております。
- ◆巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわりの
農と食
をつなぎます。

第14回 アグリフードEXPO 東京 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

8月21^水日/22^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 南展示棟



アグリデータ新時代の波



『畑でやぎを見つけたよ。』花園 航世 愛知県半田市立さくら小学校

■AFCフォーラム 平成31年3月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻12号(823号)
 ■発行/ (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/ 株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 47原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円

【本誌面価476円】

